

嗅覚表現形容詞「カウバシ」の意味変化

—“焦げるにおい”を表すようになるまで—

池 上 尚

1 はじめに—成句「梅檀は二葉より—」が示す問題—

「梅檀は二葉より—」という成句の初出例は、『保元物語』の「梅檀と云云樹は二葉より芳かんなるは。」〔金刀比羅本〕まで遡ることができる⁽¹⁾。この成句における述部形容詞「カウバシ」は、二つの大きな問題を示している。

第一に、「カウバシ」は現代語において、“食べ物を煎る・焼く・揚げる際の焦げるにおい”を表す語として限定的に使用されており、梅檀のような植物が「コウバシイ」とはもはや言えなくなっている。「カウバシ」に意味変化が起きていることがここに明らかである。

第二に、この成句の述部形容詞は「カンバシ」を使用するのが現在一般的となっている⁽²⁾が、「カウバシ」と「カンバシ」とはともに「カグハシ」の転化形という関係にある⁽³⁾。現代語において、転化形二つと原形との三語が交替することなく共存しているということは、各語が独自の意味・用法領域を築き上げたことを推測させるのである。

「カウバシ」が非常に限定的な意味で使用される語となる過程には、周辺語彙である「カグハシ」「カンバシ」との相互影響が存したことは間違いないであろう。本稿は、三語の使用状況を通時的に調査・考察し、「カウバシ」の意味変化を語彙の次元で捉えようとするものである。

2 調査の概要

韻文・散文を問わず、上代から中世までの言語資料を調査した。索引・データベース等⁽⁴⁾を使用したものもあるが、原文にあたってそれぞれの用例の意味・用法を確認した。

なお、用例を示す際には、調査語に傍線を、調査語が対象とする事物には点線を付し、出典末尾には底本を〔 〕で表示した。(二回目以降使用する場合は底本表示を割愛する。)また、調査語以外については適宜表記を改め、文脈が通るよう筆者が私的に補った部分は〈 〉で表示した。

2.1 用例の分類基準

まず、意味・用法によって二分類する。三語が本来の嗅覚表現として使用されているものを「具体的表現としてのにおい」とし、対象によって四つの下位分類項目を設けた。これに対し、三語が嗅覚表現として使用されているとは考えられないものを「抽象的表現としてのにおい」とする。後者は、

三語が「すばらしい」「好ましい」などの意味で、評価語のように使用される場合である。例1のように、通常においを嗅ぐことが不可能である対象（抽象名詞・聴覚情報など）をとっているものをここに分類する。

（例1）蘭蕙之契 芳何 隔心 哉。（雲州往来・卷中四十七返状）〔享禄本〕

以上の分類を図示すると以下ようになる。（分類上の番号は全体表の番号と対応する。）

【意味・用法】	【対象】
具体的表現としてののにおい	1：植物 2：飲食物 3：不可視の対象 空気・風／薫物（により薫染められたもの、それを身に付けている人間）
	4：その他 薫物により薫染められたことが想定されるもの ⁽⁵⁾ ／身体／その他
5：抽象的表現としてののにおい	

2.2 分類に際してのいくつかの問題について

2.2.1 「4：その他—身体」における場面性

（例2）〈藤原仲遠〉遂ニ命終ラムト為ル時ニ臨テ、心不乱ズシテ、法花経ヲ誦シテ、傍ナル人ニ告テ云ク、「我、今、兜率天上ニ可生シ」云テ、掌ヲ合テ失ニケリ。其ノ時ニ、家ノ内ニ、艶ズ馥バシキ香、匂ヒ満テ、微妙キ音楽ノ音空ニ聞エケリ。（今昔物語集・卷第十五第四十五）〔鈴鹿本〕

例2のような往生の場面は、「色彩・音・香りの豊かな表現で満たされている」という共通性が指摘されている⁽⁶⁾。このような、薫物が想定されない場面において往生人・異界の者の身体がにおいを発している場合、対象は“超越性の付随する身体”とし、全体表では（ ）付数字とした。

2.2.2 「花ならねど—」という表現の扱い

（例3）花中の鶯舌は、花ならねどかうばしひ（虎明本狂言・花子）

例3は、「鶯舌」つまり「鶯の鳴く声」が対象としてとられており、においを発しているとは通常考えられない。しかし、「花ならねど」という逆接表現から、花と対比されるものとしての“鳥の声のにおい”と解釈し「4：その他」に分類した。これに類する表現を全体表では下線表記とした。

2.2.3 “焦げるにおい”の定義

本稿では、調理に限らず、「火や熱などによって状態が変化したものにおい」を指す。その点では、薫物も“焦げるにおい”を発していると考えられる。しかし、薫物のような超越性の象徴としての“焦げるにおい”と、現代に引き継がれるような現実的なものの“焦げるにおい”とを区別するためにも、後者のみを“焦げるにおい”とし、全体表では●表記とした。

2.2.4 嗅覚表現語彙における認知のあり方—視覚か嗅覚か—

植物(特に花)や女性身体などが対象となる場合、(多分に視覚的な認知である)「抽象的表現としてのにおい」を表すともとれる例がいくつか見られた。このような分類の難しさは、日本語における嗅覚的認知それ自体が、視覚的認知と密接に関係していることに所以する。

嗅覚表現語彙における認知のあり方をめぐっては、「ニホフ」を中心に「視覚と嗅覚とのどちらが本来的認知か」という議論が行われてきた。その中で、従来の二者択一の議論から離れ、視覚と嗅覚とに共感的側面を認めた朱(1996)の指摘に注目したい。

「にほひ」にみられる視覚と嗅覚の互換、あるいは融合は、たんなるこの言葉の発生的事情によるものではなく、視覚的認知に嗅覚が絡み、重なり、あるいは物事を視覚の代わりに嗅覚ととらえる、という日本語、そして日本人の思惟特徴の一つを匂わしているのではないか⁽⁷⁾(傍点本文)

朱(1996)の言う「思惟特徴」は、「カグハシ」においても同様に指摘できるのではないだろうか。「カグハシ」の類似語構成の語を見てみると、「イロ(色)グハシ」、「マ(目)グハシ」のように、「視覚的情報+クハシ」であることをその論拠として挙げたい。対象が発散する刺激を「視覚と嗅覚との相互補完的な融合感覚」(以下、「融合感覚」)で認知することがあり、それを言語によって表現する際に、「ニホフ」や「カグハシ」、さらには「カラル」「クサシ」などの嗅覚表現が使用されているであろう。本稿では、嗅覚表現における「融合感覚」を認めつつ、2.1で前述したような「抽象的表現としてのにおい」に分類されない用例は、自動的に「具体的表現としてのにおい」に分類している。(もちろん、前者に分類される用例であっても、複数の嗅覚表現と共起していれば後者に分類する。)

3 調査結果と考察

本稿末尾に示す〈全体表〉には、用例の得られた作品名を文学ジャンル毎・時系列に並べ用例数を示す。用例の得られなかったものについては〈調査対象〉一覧を参照されたい。なお、今回の調査では、接尾辞「サ」の付加した名詞形を用例数に含めなかった。

3.1 上代—「融合感覚」を体現する「カグハシ」—

上代を対象とした調査では「カグハシ」が7例得られ、いずれも「1:植物」を対象としている。

(例4) 梅の花香を加具波之美遠けども心もしのに君をしそ思ふ(万葉集・巻第二十・四五〇〇)[竹柏園複製西本願寺本]

本居宣長は例4の歌に関して、『玉勝間』で「香をよめるは、たゞ廿の巻」と指摘している⁽⁸⁾。「香」という他の嗅覚表現と共起していることから、積極的に「具体的表現としてのにおい」に分類されて良い用例である。しかし、例4と同様に「香」と「カグハシ」が共起していても、

(例5) 榊葉の香を加久者之美求め来れば八十氏人ぞ円居せりける円居せりける(古代歌謡集・神楽歌二)〔梁塵後抄真仮名〕

は「榊には、「かぐはし」と称するほどの香りが無い」⁽⁹⁾とされる。宣長も、前掲の書の中で例4以外に「いにしへはすべて香をめぐむことはなかりし也」としていることから、「具体的表現としてのにおい」に分類するには疑問が残る用例も多くある。(本稿においては、対象によって意味・用法を決定しているため、あくまで「具体的表現としてのにおい」の用例として扱う。) 上代におけるこのような境界線の曖昧さも、嗅覚的認知における「融合感覚」の存在を示しているものと考えられる。

3.2 中古—「カウバシ」の発生—

中古に至ると、「カグハシ」2例に対し「カウバシ」53例と圧倒的な差が生じ、既に「カウバシ」に取って代わられていることが明らかである。しかし、転化形である「カウバシ」にも「カグハシ」の「融合感覚」が引き継がれていることを、『色葉字類抄』の記述が示してくれている。視覚情報としての「光彩」の項に嗅覚表現「カウバシ」が挙げられており、この語が「融合感覚」を表す語として認識されていたことが分かる。(中央の列には「カヨル」も挙げられている。) なお、後代の『世俗字類抄』『伊呂波字類抄』においても同様の記述がなされていることから、この記述が単なる誤写でないことは確かである。

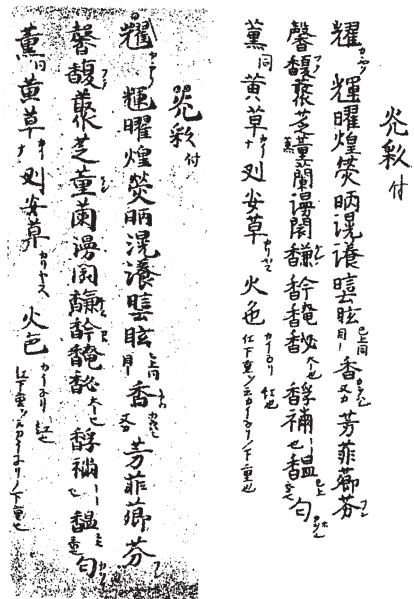
今回の調査における「カウバシ」の初出は『大和物語』であるが、築島(2007)では訓点資料における「カウバシ」の例を多数挙げており、平安初期までその成立が遡れることが分かっている⁽¹⁰⁾。

(例6) 道気を檀林に受けて、香しき風、更に覆し(カウバ 地蔵十輪経元慶七年点・序)

仮名文学作品においては、それを支える貴族文化の影響が色濃く、対象としてとられるのは「3: 不可視的对象—薫物(により薫染められたもの、それを身に付けている人間)」、「4: その他—薫物により薫染められたことが想定されるもの」が全53例中49例と圧倒的に多い。残りの4例の内、3例は「1: 植物」である。

(例7) 色などもいとよなる扇の、香などもいとかうばしうておこせたり。(大和物語・九十一)〔伝為家筆本〕

(例8) 名香の、いと、かうばしくにほひて、櫛の、いと、はなやかにかをれるけはひ(源氏物語・



(前田本・上一〇〇ウ) (黒川本・上八二オ) 『色葉字類抄研究及び索引』風間書房、108頁

総角)〔大島本〕

『雲州往来』のような漢文訓読文の往来物には「抽象的表現としてののにおい」も見られた。

(例9) 千金 德馨難^シ忘^レ。(雲州往来・卷上四十二返状)

3.3 中世—「カウバシ」の意味・用法の拡張—

3.3.1 院政・鎌倉期

中世における和漢混淆文の発達に伴い、漢字表記の読み不明用例が増加する⁽¹¹⁾。しかしながら、読みの確定している用例は全て「カウバシ」で、漢文訓読文中で好まれる撥音便形である「カンバシ」は軍記物語においても未だ見られない。このような「カウバシ」優勢の使用状況を踏まえ、中世における多くの読み不明用例も「カウバシ」と読む可能性が高いものと考えている。

院政・鎌倉期においても、やはり資料性や時代を反映するような対象が目立つ。特に仏教説話には往生の場面が頻出することから、「4：その他—超越性の付随する身体」が対象としてとられる用例が多く見られる。

(例10) 〈ひかるもの〉おほきさ人のいたく程にてなかさ八尺餘はかりなん侍りしそのかうはしき事たとへんかたなくめてたし(水鏡・第三十五代推古天皇)〔蓬左文庫本〕

(例11) 太子生レ給ヘリ。人来テ、太子ヲ懷テ寝殿ニ入ル、俄ニ赤黄ル光リ、殿ノ内ヲ照ス。亦、太子ノ御身、馥^(ママ)シ事无限シ。四月ノ後、言語勢長ク、明ル如シ年ノ二月ノ十五日ノ朝ニ、太子、掌ヲ合テ東ニ向テ、「南无佛」ト宣テ、禮シ給フ。(今昔物語集・卷第十一第一)

(例12) 本師源空のおはりには／光明紫雲のごとくなり むらさきのくものごとし／音楽哀婉雅亮にて あはれみすめるこゝろなり／異香みぎりに暎芳す かゝやきかうばし(三帖和讃・高僧)〔文明本〕

上記3例はいずれも光輝表現と共起しており、“超越性”の視覚的認知を表す用例でもある。

3.3.1.1 「飲食物」から“超越性の象徴としてののにおい”を嗅ぎ取る

院政・鎌倉期における大きな変化の一つは、中古では対象としてとられることのなかった「2：飲食物」が2例見えることである。

(例13) 極テ老タル僧一人居タリ。委ク見レバ、鱗・骨ナドヲ食ヒ散タリ。其香、鼻キ事无限シ。……初メハ鼻カリツルニ、此ノ度ビハ極メテ馥シ。……鮎鱗・骨ト見ツルハ蓮華ノ萎鮮ナルヲ鍋ニ入テ煮、食ヒ散シタリ。此ノ老僧ヲバ、教代和尚トナム申ス。人ノ夢ニハ、弥勒ニテナム見エ給フナル(今昔物語集・卷第十一第二十八)

例13に関しては、森(2004)に「生臭い魚が香ばしい蓮華に変じたのは、それを食する弥勒の力によるものであるとして、本尊の力の偉大さを語ろうとするものである。」⁽¹²⁾という指摘があるように、対象となる「蓮華」、さらには「弥勒」の“超越性”を象徴する「馥シ」である。院政・鎌倉期における「カウバシ」が表していたのは、飲食物の“超越性の象徴としてののにおい”であった。

3.3.1.2 「カウバシ」が表す“焦げるにおい”の初期段階

次に注目すべきは、「カウバシ」が“焦げるにおい”を表すようになることである。初期の用例はいずれも「油綿をさしたともし火」を対象としてとっており、現代語のニュアンスとはやや異なる。

(例 14) 秋の夜しとねのほとりに蘭燈をかかぐといへり。蘭草をあぶらに和してそのかをとる也。

又云、蘭草のしるを煎じて、そのあぶらのともしびをかかぐるに、光の至る所かうばしと云り（百詠和歌・八・燭）（日）

(例 15) ともし火の尽きたりけるに、あぶらわたをさしたりければ、よにかうばしく匂ひけるを、堀河、ともし火はたき物にこそ似たりけれといひたりければ、兵衛とりもあへず、ちやうじがしらの香やにほふらんとついたりける、いとおもしろかりけり。（今物語）（日）

(例 16) 油綿をさし油にしたりけるがいかうばしく匂ひければ、ともし火はたき物にこそ似たりけれ（一八九四・菟玖波集）〔安藤野雁筆本〕

「ニホフ」や「カラル」が一語では単なるにおいの良さを表していたのに対し、「カウバシ」は一語単独で“焦げるにおい”をも表すようになる。原形「カグハシ」や他の嗅覚表現語彙とは別の、独自の意味を持ち始めたのである。

ところで、“焦げるにおい”それ自体は古くから認識されていたはずである。しかし、『源氏物語』真木柱の巻に「疎ましげにこがれたるにほひ」とあるように、それは忌むべき火災のにおいでもあった。これに対して、「カウバシ」の表す“焦げるにおい”は、例 15・16 の「たき物にこそ似たりけれ」という表現からプラスの評価を伴っていることが分かる⁽¹³⁾。

3.3.2 室町期

3.3.2.1 「飲食物」から“現実的なものにおい”を嗅ぎ取る

院政・鎌倉期に登場した「飲食物」のにおいは資料性を反映するような“超越性の象徴としてのにおい”であった。室町期に至ると、“現実的なものにおい”の用例が見られ始める。

(例 17) ^{ヒシヲヒシヲヒシヲ}醃醃醬……何ヤラ、香イウマサウナ、カ、スルトテ（古文真宝彦龍抄）〔叡山文庫本〕

例 17 は「ウマサウナ」という味覚表現と共起していることや、前後に超越的なものについての表現が見られないことから、飲食物の中に“現実的なものにおい”を嗅ぎ取った初出例として良いだろう。（中古・中世における「カウバシ」優勢の状況を踏まえると、恐らく「カウバシ」と読んで良い用例であろう。）

しかし、同時代に成立した他の言語資料においては、“超越性の象徴としてのにおい”と“現実的なものにおい”とが混在・錯綜している状態である。

(例 18) 作た酒の香が皃然として香しいぞ。其を以て祭りをすれば鬼神もよくうけらるゝ程に、国家も光明があるぞ。（毛詩抄・卷之十九）〔書陵部蔵本〕

(例 19) 廿四五ばかり成天女、金の折敷に、瑠璃の盃を据へて来り、……をしきにいれたる物〈=酒〉を、なめて御覧ずるに、かうばしく甘き物なり。（梵天国）〔御伽草子板本〕

例 18 は「国家も光明がある」「酒」、例 19 は「天女」が持って来た「酒」とある。その文脈から、飲食という行為に焦点化された“現実的なものにおい”としては認識されていないことが分かる。

また、飲食物の“焦げるにおい”を対象としてとる例 20 のようなものも見られるようになる。

（例 20）旨酒——酒を飲^ウで悦、あぶり物も香しいぞ。（毛詩抄・卷之十七）

例 20 は、現代語と同質の“焦げるにおい”（現実的なものとしての飲食物の“焦げるにおい”）を表しているが、読みが確定できないのが問題である。読みの確定できる初出例としては、中世口語を保存している虎明本狂言（1642）が挙げられ、「カウバシ」を使用していることが分かる。

（例 21）伯蔵主\さりながら、何やらかうばしひにはひがいたすが、何物をおいてだますぞ、……
はあ、わかねずみを、油あげにしすまひておひたわ、……まつはむまひかゝする（虎明本狂言・釣狐）

「わかねずみ」の“焦げるにおい”を、「かうばしひ」が一語単独で表している。また、味覚表現「むまひ」に換言されていることに注目したい。（前掲の例 17『古文真宝彦龍抄』における味覚表現との共起とは異なる。）味覚が嗅覚へと転用可能になるのは、“焦げるにおい”が“現実的なものとしての飲食物”の中に嗅ぎ取られるようになったことを、如実に表しているのではないだろうか⁽¹⁴⁾。

3.3.3.2 「カンバシ」の発生

今回の調査で得られた「カンバシ」の初出例は『信長公記』（1598）の成句の例である。もっとも、[ŋ] の撥音化という音韻現象が、表記に完全に反映されているとは考えられず、より古い時代から [ŋ] が撥音で発音されていた可能性は十分にある。

通時的に眺めてみても 2 例しか見られなかった。

（例 22）梅檀者二葉よりしてかんばしく（信長公記・十二）〔近衛家陽明文庫本〕

（例 23）花中の鶯舌は、花ならずしてかんばし（天理本狂言・花子）⁽¹⁵⁾

しかし、それまで「カウバシ」の独壇場であった成句「梅檀は二葉より一」の述部や、「花ならねど一」のようなある程度固定化された表現の述部に使用されており、実際に使用されていても、表記に現れてこない発音であったことを推測させる。

用例が少ないために、「カウバシ」「カンバシ」二語間の使い分け意識の有無・様相を分析することは困難である。そこで、試みに『日葡辞書』（1603）の記述を参照してみたい。（語釈は『邦訳日葡辞書』岩波書店、による。）

「Cōbaxij. 匂いのよい（もの）、芳香を放つ（もの）。」

「Canbaxij. 香気がある（もの）。」

※「カグハシ」なし

二語ともに立項されているが、語釈を見る限りでは使い分け意識が存していたようには考えられな

い。しかし、他の語の語釈に使用されるか否かという点において二語間に違いが見られた。「カウバシ」は「香味・香花・濃香・薫風・薫油・芬芬・芳名」など多くの語の語釈に使用されている。これに対し「カンバシ」は、それ自身の名詞形「かんばしさ」の語釈に使用されているだけである。中古以来の「カウバシ」優勢の中にあっては、「カンバシ」は使用頻度の低い語であったのだろう。

4 おわりに

近世以前の「カウバシ」は現代語「コウバシイ」よりもはるかに意味・用法が広く、原形「カグハシ」・撥音便形「カンバシ」の二語を圧倒する中心的な語であった。現代語「コウバシイ」が表すような飲食物の“焦げるにおい”は、薫物を連想させるような“焦げるにおい”という段階を経ていることも明らかとなった。

室町末期頃、飲食物の“焦げるにおい”を表すようになった「カウバシ」は、同じ頃始まるオ段長音の混同に伴い「カンバシ」との発音の相違が明確化し、二語に別語意識が働くようになる。近世に至ると、「カグハシ」が和歌・文語文において再び使用されるようになり、「カンバシ」も浄瑠璃など限られた文体の中で使用され始め、存在価値を獲得していくことになる。これら二語の定着とともに、「カウバシ」は飲食物の“焦げるにおい”の意味へ限定されていくことになるのだが、近世以降の詳しい史的変遷については別稿に譲りたい。

[付記] 本稿は、2009年12月5日に行われた早稲田大学日本語学会における口頭発表に基づいています。席上多くのご指導を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

注(1) 観仏三昧経「梅檀ハ根芽漸漸成長シ、纒二樹ヲ成サント欲シテ、香氣昌盛」に基づく成句である。(中村幸彦校注(1961)『風来山人集』岩波書店、423頁参照)

(2) 管見の限りでは、『日本国語大辞典第二版』『角川古語大辞典』のみ「カウバシ」「カンバシ」の二語を採用しており、それ以外の辞書においては「カンバシ」のみを採用していた。

(3) 「カグハシ」第二音節〔ŋ〕が、その鼻音性のために〔ū〕と鼻音化したのが「カウバシ」(亀井孝(1956)「ガ行のかな」『国語と国文学』33-9)で、撥音化したのが「カンバシ」(浜田敦(1952)「撥音と濁音との相関性の問題—古代語における濁子音の音価—」『国語国文』21-3)である。

(4) 国文学研究資料館「日本古典文学本文データベース」、日国オンライン(以下、(日))を利用した。なお、日国オンラインで得られた用例は全体表に含めていない。

(5) 薫物によって薫染められている過程が言語表現として明示されていない場合も、作品の世界設定等からその過程が想定される場合は、「3:不可視的对象—薫物」と同様に太字表記とし、「4:その他のにおい」に分類する。

(6) 千々和到(1987)「仕草と作法—死と往生をめぐって」『日本の社会史第八巻 生活感覚と社会』岩波書店、145頁

(7) 朱捷(1996)「「にほひ」にみる日本人の嗅覚」『日本研究国際日本文化研究センター紀要』15、角川書店、70頁

近年では、多田(2004)の「嗅覚(聴覚も)は個別的な感覚としてあったのではなく、視覚によって統合される全体的な感覚として存在した」(多田一臣(2004)「古代人の感覚 ニホフとカから」『文学』5-5、岩

波書店, 22頁) という指摘や、藤原(2008)の「[「にほふ」は本来、視覚と嗅覚との両方にわたるような共感覚的な感覚を表していた」(藤原克己他(2008)『源氏物語—におう、よそおう、いのる』ウェッジ, 37頁) という指摘がある。また、特定の語は挙げていないが、香道における「香を聞く」という表現から、山縣(1993)のように嗅覚と聴覚との共感覚を認めるものもある。(山縣熙(1993)「第三感覚=匂いの美学のために」『思想』824, 岩波書店)

- (8) 『玉勝間』卷十三「梅の花の哥に香をよむ事」
- (9) 小西甚一校注(1957)『古代歌謡集』岩波書店, 297頁
- (10) 築島裕(2007)『訓點語彙集成』2, 汲古書院, 434-436・623頁
- (11) これらの用例に関しては用字及びその送り仮名も分析したが、特筆すべき傾向は見られなかった。ただ『今昔物語集』においては、天竺・震旦部「香」、本朝部「馥」という用字の相違が見られた。
- (12) 森正人(2004)「罪業のしるしと予感—古代仏教説話に漂う匂い—」『文学』5-5, 岩波書店, 26頁
- (13) 一語単独でマイナス評価を伴う“焦げるにおい”を表す語は多くある。その中でも「コゲクサシ」「フスボリクサシ」は成立が室町期頃であることが分かっている。「カウバシ」の意味変化とこれらの語の成立との関連も看過できない問題である。
- (14) 近世初期成立の他の台本と該当箇所を比較を試みたところ、版本狂言記(1660)では、「むまくさや」という嗅覚・味覚両方に亘る表現が使用されていることが分かった。よって、「カウバシ」の意味変化は虎明本固有の言語意識によるものではないと言えよう。なお、天正狂言本(1578)、和泉流・天理本(1645前後)には嗅覚表現がなく、大蔵流・虎清本(1646)、和泉流・和泉家古本(1653~93)には曲自体がなかった。
- (15) 大蔵流・虎明本(1642)では「かうばしひ」(前掲例3)が使用されている。天正狂言本、版本狂言記には嗅覚表現がなく、大蔵流・虎清本、和泉流・和泉家古本には曲自体がなかった。

参考文献

- 国立国語研究所(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
 松本剛(1978)「カグハシ考」『萬葉』99, 萬葉學會
 三田村雅子・河添房江編(2008)『薫りの源氏物語』翰林書房
 安田政彦(2007)『平安京のニオイ』吉川弘文館
 Corbin Alain, 山田登世子・鹿島茂訳(1990)『においの歴史 嗅覚と社会的想像力』藤原書店

調査対象

- ※用例の得られた作品 『古事記大成』8, 平凡社(1958) / 『拾遺和歌集の研究 索引篇』大学堂書店(1976) / 『続千載集総索引』明治書院(1990) / 『菟玖波集総索引』風間書房(1983) / 『新後拾遺集総索引』明治書院(2001) / 『新統古今集総索引』明治書院(2002) / 『新撰菟玖波集自立語索引』広島中世芸研究会(1970) / 『宇津保物語本文と索引 索引編』笠間書院(1975) / 『栄花物語本文と索引 自立語索引篇』武蔵野書院(1985) / 『今鏡本文及び総索引』笠間書院(1984) / 『水鏡本文及び総索引』笠間書院(1990) / 『土井本太平記本文及び語彙索引 索引篇』1 勉誠社(1997) / 『増鏡総索引』明治書院(1978) / 『信長公記』角川書店(1969) / 『枕草子総索引』右文書院(1967) / 『徒然草総索引』至文堂(1955) / 『雲州往来享禄本研究と総索引 索引篇』和泉書院(1997) / 『更級日記総索引御物本』武蔵野書院(1956) / 『源通親日記本文及び語彙索引』笠間書院(1991) / 『たまきはる(建御前の記) 総索引』明治書院(1979) / 『古本説話集総索引』風間書房(1969) / 『唐物語校本及び総索引』笠間書院(1975) / 『発心集本文・自立語索引』清文堂出版(1985) / 『閑居友本文及び総索引』笠間書院(1974) / 『十訓抄本文と索引』笠間書院(1982) / 『海道記総索引』明治書院(1976) / 『抄物資料集成』清文堂出版(1976) / 『抄物資料集成別巻』清文堂出版(1976) / 『湯山聯句抄本文と総索引』清文堂出版(1997) / 『句双紙抄総索引』清文堂出版(1991) / 『中華若木詩抄文節索引』上~下, 笠間書院(1983~88) / 『御伽草子総索引』笠間書院(1988) / 『天草版平家物語対照本文及び総索引 索引篇』

明治書院(1986)／『天草版金句集本文及索引』白帝社(1969)／『ぎやどべかどる本文・索引キリシタン版』2,清文堂出版(1987)／『謡曲二百五十番集索引』赤尾照文堂(1978)／『大藏虎明本狂言集総索引』1～8,武蔵野書院(1982～88)／『狂言六義総索引』勉誠出版(2005)○『日本古典文学大系』本文によるもの『万葉集総索引』平凡社(1974)／『新古今集総索引』明治書院(1970)／『大和物語語彙索引』笠間書院(1970)／『落窪物語総索引』明治書院(1967)／『浜松中納言物語総索引』武蔵野書院(1964)／『狭衣物語語彙索引』笠間書院(1975)／『保元物語総索引』武蔵野書院(1981)／『平家物語総索引』学習研究社(1973)／『曾我物語総索引』至文堂(1979)／『今昔物語集自立語索引』笠間書院(1982)／『古今著聞集総索引』笠間書院(2002)／『宇治拾遺物語総索引』清文堂出版(1975)○『新日本古典文学大系』本文によるもの『源氏物語語彙用例総索引 自立語篇』2 勉誠社(1994)○日本古典文学大系 DB『沙石集』『三帖和讃』○Japanese Text InitiativeDB『源平盛衰記』

※用例の得られなかった作品『竹取物語』『伊勢物語』『平中物語』『多武峯少将物語』『堤中納言物語』『大鏡』『篁物語』『夜半の寝覚』『とりかへばや物語』『松浦宮物語』『平治物語』『こわたの時雨』『義経記』『土佐日記』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『讃岐典侍日記』『弁内侍日記』『うたゝね』『十六夜日記』『とはずがたり』『お湯殿の上の日記』『竹むきが記』『義経東下り物語』『新猿楽記』『方丈記』『東関紀行』『歎異抄』『吾妻鏡』『天草版伊曾保物語』『どちりなきりしたん』『論語抄』『杜詩統翠抄』『漢書抄』『古文真宝桂林抄』『莊子抄』『日本書紀兼俱抄』『日本書紀桃源抄』『古今和歌集』『後撰和歌集』『後拾遺和歌集』『金葉和歌集』『詞花和歌集』『千載和歌集』『新勅撰和歌集』『続後撰和歌集』『続古今和歌集』『続拾遺和歌集』『新後撰和歌集』『玉葉和歌集』『続後拾遺和歌集』『風雅和歌集』『新千載和歌集』『新拾遺和歌集』『建礼門院右京大夫集』『梁塵秘抄』『閑吟集』

全体表

用例数 作品 (成立年代)	カグハシ					カウバシ					カンバシ					読み不明				
	具		具			抽	具		具			具		具			抽			
	1	3	1	2	3	4	5	1	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	
古事記 (712)	1																			
万葉集 (759)	6																			
拾遺和歌集 (1005-07)	1																			
新古今和歌集 (1205)			1																	
続千載和歌集 (1320)	1																			
菟玖波集 (1356)						●														
新後拾遺和歌集 (1384)							1													
新編古今和歌集 (1439)		1			1													(3)	1	
新撰菟玖波集 (1495)			1		1		2													
大和物語 (10C中)						2														
宇津保物語 (10C後)		1	2		11															
落窪物語 (10C末)					3	2														
源氏物語 (1008)			1		18	4														
栄花物語 (1028-37)					2															
浜松中納言物語 (1053)					2															
狭衣物語 (1076)					3															
今鏡 (1170)			1			(1)														
水鏡 (12C後)						(3)														
保元物語 (13C前)			1				1													
平家物語 (13C前)			1			(2)														
源平盛衰記 (14C前)						1				1									1	
曾我物語 (南北朝時代)			1			1	1													
太平記 (1368-75)			4																	
増鏡 (-1376)			1																	
信長公記 (1598)								1												
枕草子 (1001)					1															
徒然草 (1331)			1																	
雲州往来 (1058)							1											1	1	
更級日記 (1060)						1														
源通親日記 (12C後-13C前)						(1)														
たまきはる (1219)					2															

用例数 作品 (成立年代)	カグハシ					カウバシ					カンバシ				読み不明					
	具		具			抽	具		具			具		具			抽			
	1	3	1	2	3	4	5	1	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	
今昔物語集 (12C初)																2	2	11	5	1
古本説話集 (12C前)						1	2													
唐物語 (1212-16)							(1)													
発心集 (-1215)							(5)	1												
宇治拾遺物語 (1221)							3	2	1	(3)							1			
閑居女 (1222)								(1)												
十訓抄 (1252)															2			(3)	1	
古今著聞集 (1254)								(3)												
沙石集 (1283)							1	(1)	1											1
海道記 (1223)									1						1					
三帖和讃 (鎌倉時代)								(1)												
百丈清規抄* (1462-)			1																	
史記抄* (1477)															1					
古文真宝彦龍抄* (1490頃)																1				
湯山聯句抄 (1504)															9			3	(3)	
毛詩抄※ (1532-55)				3					1						5	7		1		3
四河入海※ (1534)							3								1	1				
句及紙抄 (16C)			1														1			
蒙求抄* (室町時代)															3					
中華若木詩抄 (1633)																6		1		2
梵天国 (室町時代末)				1		(2)														
天草版平家物語 (1592)			1																	
天草版金句集 (1593)			1	1																
ぎゃどべかどる (1599)										4	2									
謡曲二百五十番 (室町時代)			1	1	1															
虎明本 (1642)				●			1													
天理本 (1645前後)															1					
上代	7																			
中古	1	1	3			40	9	1											1	1
中世(院政・鎌倉)	1		10			8	32	4						8	2	13	38	3		
中世(室町)		1	8	7	6	7	5	1	1					25	11	7	3	5		
分類毎の総計	9	2	21	7	54	48	10	1	1	33	13	20	42	9						
語毎の総計	11					146				2							118			

太字：薫物 (によって薫染められたことが想定されるもの) のにおい () : 超越性の付随する身体 ● : 焦げるにおい 下線 : 「花ならねどー」 網掛け : 成句
 ※要語索引]での調査のため全例数ではない作品
 大まかな文学ジャンルでまとめたものは、左端にそのジャンルを示した。空欄は用例数0を示す。